

スポーツ健康学部 永木耕介 (2019/5/14)

## 日本武道学会・優秀論文賞 (2018 年度) 受賞について

受賞日：2018 年 9 月 5 日 (東京学芸大学)

論文タイトル：柔道授業の初習段階における学習順序の違いが生徒の学習成果に及ぼす影響

共著者：山本浩二・島本好平・永木耕介

出典：武道学研究 50(3)：149-158, 2018

内容：本研究は、初習者を対象とした中学校体育の柔道授業において、「固技<sup>かためわざ</sup>」と「投技<sup>なげわざ</sup>」のどちらを先に指導・学習するかという順序の違いが、「心理社会的学習成果」に及ぼす影響を明らかにしたものです。

柔道 (正式名称：日本傳講道館柔道) は、明治 15 年に教育者であった嘉納治五郎 (1860-1938 年) により旗揚げされて以後、「武道」の代表格として日本はもとより世界中に広まり今日に至っています。柔道の前身である江戸期の柔術全般において、主に相手を抑えて動けなくする「固技」および相手を投げる「投技」は、すでに技術の中核でした。しかし、元来からこれら 2 種の技術は性質が異なっており、しかも学校における体育授業という限られた時間の中でどちらを重視すべきか、どちらから指導・学習すべきかについてはこれまでも種々の議論がありました。さらに、平成 20 年の学習指導要領から中学校体育授業 (1, 2 年生) において「武道」が必修化され (平成 24 年度から完全実施)、全国の中学校の 6 割以上が柔道を採用・実施する中で、安全性も含めた教材としての価値を一層明確にすることが求められているところです。

我々 (山本・島本・永木) はこれまでに、柔道授業による心理社会的学習成果は、「相手の技や動きに対応することができる (対応行動)」、「相手との積極的な学び合い・協同学習ができる (相互作用)」、「礼法により自己のコントロールや相手への感謝を表すことができる (礼儀作法)」、「授業の決まり事やマナーを守ることができる (規範遵守)」の 4 側面から成ることを明らかにし、それらを評価するための尺度を開発しました (体育学研究 62(1)：323-337, 2017)。今回の受賞論文では、中学 1 年生 2 クラス (計 61 名：男女混合) を対象に、1 クラスは「固技」先行型、他クラスは「投技」先行型の授業 (計 8 時間) を実施し、先の尺度 (4 因子 16 項目) により学習成果を測定した結果、「固技」先行型における「対応行動」と「規範遵守」が「投技」先行型よりも有意に高くなることが明らかになりました。また、その他の「相互作用」と「礼儀作法」についても「固技」先行型に高くなる傾向が認められたことから、「固技」の学習を先に行った後に「投技」の学習を行った方が心理社会的学習成果は向上する可能性が示唆されました。